「論文要旨」

韓日テンス・アスペクト形式の意味と使用条件

2013 年 3 月

一橋大学大学院言語社会研究科

博士課程

学籍番号 LD082003

氏　　名　崔　栄殊

本論文では、韓国語の過去形式-ess-及び大過去形式-ess-ess-の意味と用法の関係を明らかにし、また日本語との対照も行った。本論文では、-ess-及び-ess-ess-が持つ固有の意味はただ一つであり、これらの形式が複数の用法を持つのは、当該形式がある特徴を持った文脈で使用されることの自然な帰結であることを示した。そして、その文脈は話者の知識や認識状態等によって特徴づけられることを示した。

-ess-及び-ess-ess-を扱った先行研究は数多いが、これらが時制、相、叙法のうちのどの文法範疇に入るかといった議論や、単なる用法の記述に留まっているものが多かった。なぜ-ess-や-ess-ess-という形式が複数の用法を持つのかといった根源的な問題や、特定の状況で-ess-が他形式とどのように使い分けされているのかといった実際的な使用レベルでの問題が問われることはほとんどなかった。本論文では、こういった問いに答えようとするものである。本論文の特徴は、従来の研究では意識されることが少なかった当該形式の意味と用法を明確に区別している点である。つまり、従来の研究では意味論と語用論の区別があまり意識されていなかったが、本論文では形式が個別に持つ「意味」とそれが特定の文脈で使用されるところから得られる「用法」とが明確に区別して扱われる。この意味論と語用論の区別が上記で挙げた根源的な問題と使用レベルでの問題の解決に光を射すことを明らかにした。

本論文の構成は次のようなものである。第 1 章では韓国語のテンス・アスペクト形式の体系と関連する先行研究を概観し本論文の目的及び問題を提出した。第 2 章では韓国語の-ess-のムード用法を、第 3 章では韓国語の-ess-の結果経験状況における振る舞いを分析し、日本語と対照した。第 4 章では過去形式-ess-ess-の意味に関する提案を行った後、提案した意味から 3 つの用法が自然に導出されることを示した。また、日本語との対照も行った。最後に第 5 章で本論文のまとめと日本語教育、韓国語教育への応用の可能性について述べた。

以下では、各章ごとの要旨を述べる。

第 1 章では、韓国語のテンス・アスペクト形式の体系と関連する先行研究を概観し本論文の目的及び問題を提出した。

本論文の主な分析対象は韓国語の-ess-と-ess-ess-である。まず、-ess-は過去を表すと考えられるが、現在を表すゼロ形式φや結果状態を表す-e iss-が使用されることが見込まれる状況でも使用が可能であることを指摘した。そして、このようなことがなぜ可能なのかという問題を提出した。また、日本語においてもある状況では同じ様な現象を見ることができるが、別の状況では韓国語と日本語でその振る舞いに異なりが生じることを指摘した。そして、この振る舞いの異なりは何によって生じるかという問題を提出した。

もう一つの主な分析対象である-ess-ess-については、-ess-ess-が過去形式-ess-が反復されたものであり、単純に考えると過去の過去を表すとなるがその実体は自明ではないことを指摘した。そして、その実体はどのようなものであるかという問題を提出した。ま

た、-ess-ess-を使用することで-ess-単独では得られない何らか語用論上の効果があることが期待されるがそれはどういったものか、またそれは-ess-ess-の意味とどのように関係するかといった問題を提出した。加えて、日本語ではどのような表現が対応するかといった問題も提出した。

第 2 章では、次の(1)のように現在形が使用されても良いような状況で使用されている過去形（日本語では-タ、韓国語では-ess-）をムードの用法と呼び、このような用法における過去形の使用について話者の知識の変化の観点から使用原理を明らかにした。

(1)（探していた写真が、探しても見つからなかった机の引き出しの中で偶然見つかったという状況で）

a.あ、ここにあった。

b.e　yeki　iss-ess-ta.

あ　ここ　ある-た

具体的には以下のように述べた。

まず、ムード用法の-タについては、発話時に実現される事態 p と関係がある知識 K_p を持っている話者が時幅 I_1 で認識 p を持たない状態から時幅 I_0 で p を持つ状態に変わったことにより認識の変化が起きている時に使用されるとした。従って、話者が「発話時に実現されている事態 p と関係がある既存知識 K_p を持っていない」場合や「発話時に実現されている事態 p に対する話者の認識に変化が起きていない」場合は-タは使用できないと述べた。

そして、ムード用法の-ess-については、発話時において実現されている事態 p と関係がある知識を持っている話者が K_p という知識状態に至る間に知識の変化が起きた場合に使用されるとした。従って、発話時において実現されている事態 p と関係がある知識を持っていない場合や、発話時の知識状態 k_p に至る間に知識の変化が起きていない状況では-ess-は使用できないと述べた。

以上のことから、ムード用法の-タと-ess-の使い分けは次のようになることを明らかにした。

1. 日本語の-タと韓国語の-ess-が共に自然になる状況
   発話時の前から発話時現在に成立している事態と関係がある前提知識を持っている話者の認識と知識に変化が起きた場合
2. 日本語の-タが自然で、韓国語の-ess-が不自然になる状況
   発話時現在に成立している事態と関係がある前提知識が発話時に得られた新規知識と差がなく、単に発話時に成立する事態に対する話者の認識のみ変化が起きた場合

3. 日本語の-タが不自然で、韓国語の-ess-が自然になる状況

発話時に実現されている事態について「p は成立しない」という前提知識 $K_{\neg p}$ を持っている話者が命題 p が成立している状況に直面し、前提知識そのものが $K_{\neg p}$ から K_p に修正され、知識状態は変化している。しかし、話者は発話時現在に成立している事態に発話時の前から話者の注意が向けられていなかったため、認識の変化が起きなかった場合

4. 日本語の-タも韓国語の-ess-も共に不自然になる状況

発話時現在に成立している事態に発話時の前から話者の注意が向けられてなく、認識や知識の変化も起きてない場合

第 3 章では、次のように定義される結果経験状況における-ess-と結果状態を表す-e iss-の使い分けについて分析した。

結果経験状況 : 話者が変化の瞬間を直接経験せずに結果状態のみに直接経験している状況を[結果経験状況]と呼ぶ。

本論文の提案は次のようなものである。

[結果経験状況]において、「話者の現実世界」、「話者の予定の世界」、「常識の世界」で成立する話者の前提知識にある当該の事物の属性から考えてありえない変化の結果状態を直接経験した場合には、-e iss-ではなく-ess-が使用される。-e iss-は発話時の知識状態と話者の予想との間に大きな相違がない客観的な状況や単なる場面を描写している状況で使用される。

また、[結果経験状況]における韓国語の-ess-と日本語の過去形式-タの振る舞いの異なりについても分析した。

まず、韓国語の-ess-と日本語の-タの[結果経験状況]における使用条件として次のようなものがあることを明らかにした。

[結果経験状況]では、話者の既存認識と発話場で直接経験により得られた新規認識とが矛盾し、かつ発話場の状況に関する話者の予想がなければならない。

また、-ess-は上記の条件が揃えば基本的にすべての状況で使用が可能であるが、-タは次のような条件も揃っていなければ使用できないことを明らかにした。

-タが[結果経験状況]で使用されるには、物理的に起こるはずのない変化の存在を知りこの当該のモノ(individual)の変化に対する話者の新たな認識が、当該のモノに対する話者の前提知識と矛盾が生じていなければならない。

第 4 章では、次の問題を提出しその解答を試みた。

問題： -ess-ess-はどのような意味を持つか。

そして、p-ess-ess は[p-ess]-ess のような構造を持っており、これは次のような意味を持つとした。

[p-ess]-ess の意味：出来事 p が設定時より以前に成立しているという評価が発話時に成立する

また、-ess-ess-は次のような３つの用法を持ち、各々の用法は次のように特徴づけられることを明らかにした。

A.知識修正用法
過去のある時点（R.T.）で p-ess-と話者が思っていなかった時の用法
B.断絶用法
過去のある時点（R.T.）で p-ess-と既に話者が思っており、かつ S.T の時点から見ると R.T.の時点で p-ess-が成立していることが意外に見える用法
C.回想用法
過去のある時点（R.T.）で p-ess-と既に話者が思っており、かつ R.T.の時点で p-ess が成立しているといった評価が成立することが意外に見える用法

そしてこれら３用法のすべてが上で挙げた-ess-ess-の意味と使用文脈から自然に導出されることを示した。

上記に加え、-ess-ess-ess-が使用される文は文法的か否かといった問題についても議論した。この問題はこれまで研究者の間で統一的な見解が得られていなかったが、本論文では「知識修正によって得られた判断が発話時の前にあることを表す」適格な文であり、知識修正用法の-ess-ess-に関連していることを明らかにした。

最後に、-ess-ess-が日本語のどのような表現に対応するかについて考察した。-ess-ess-は、テイタ、テイル、タンダ、テイタンダ、テイルンダといった日本語の表現に対応することを指摘し、一部その理由についても指摘した。

最後の第 5 章では、本論文のまとめと日本語教育、韓国語教育への応用の可能性について述べた。